

みんなのひろば

米国の花粉症に学ぶ

ブタクサは中南米原産の裸地を好む侵入雑草であり、人の手の加わっていない自然状態では火災や洪水の跡地くらいでしか繁茂しない。しかし、旺盛なフロンティアスピリットによって米国開拓が進められて裸地が増えるにつれ、ブタクサは米国全土に版図を広げていった。つまり、ブタクサ花粉症の流行は米国開拓史と表裏一体をなしている。

ブタクサは霜が降りると枯れるため、米国では標高が高い場所が花粉症に対する聖域となった。1880年代になると各地に花粉症リゾートが形成され、毎年8月半ばになると、数千人もの花粉症患者たちがニューハンプシャーのホワイトマウンテンズやニューヨーク州北部のアディロンダック山脈、スペリオル湖やコロラド高原などに避難した。小説家のヘミングウェイ一家も同様だった。

米国では、こうして花粉症ビジネスが急速に振興することになった。ミットマンの2004年の論文によると、1892年夏の3カ月間にホワイトマウンテンズに避難していた花粉症患者たちが現地に落としていった金額は約500万ドルと見積もられ、ニューハンプシャー州全体の農業所得の年間総計を上回るものであった。

「花粉症は今日、米国の特産品である」というのは1911年にウィリアム・ハードが残した言葉である。私も、日本屈指の花粉症

患者避難でリゾートに

東京農業大国際食料情報学部教授

小塩海平

(東京都東久留米市)



罹患率を誇る群馬県で、何らかの花粉症ビジネス(対策)を生み出すことができないだろうかと思案しているが、なかなか良い知恵が浮かばない。読者の皆さんからアイデアをお借りしたいところである。

米国では30年代になって、国内数十都市で空中花粉の定点観測が行われるようになった。国中から送られてくるプレパライトの花粉数の計測を担当したダーラムは「目には見えない花粉の嵐が、まるで夏のブリザードのように、米国の東半分の大気を埋め尽くし、毎年何十億という有毒な粒子が25〜50日間わたって飛び続ける現実を描き出した」と述べている。ニューヨークのワールドテレグラムが天気情報の中で、毎日の花粉数の公開を始めたのはこの頃であった。

やがて米国では、アウトドアにおける銃の普及と花粉の脅威が人々の目をインドアライフに向けさせることになり、室内空気の浄化を目的としたエアコンが開発された。

今夏、伊勢崎市が最高気温の国内記録を更新したが、ブタクサ花粉の侵入を防ぐための研究が進んだおかげで、私たちもエアコンの恩恵にあずかることが可能になったのだという歴史的事実に思いを巡らせたい。

私は、群馬県においても花粉症や猛暑を克服する手探りを始めることが、将来、県民のみならず、広く次世代の助けとなり利益につながるはずだと信じてやまない。

【略歴】専門は植物生理学。著書に「花粉症と人類」、共著に「農学と戦争 知られざる満洲報国農場」など。東京農業大で博士後期課程修了。静岡県出身。